
黒い刺青

中間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒い刺青

【Nコード】

N7694Y

【作者名】

中間

【あらすじ】

化け物と恐れられ一人で生きていたリクトは、いきなり異世界に送られることになる。

誰にも使命を与えられなかったリクトは、山奥で静かに過ごしていた。

ある日、山で迷っていた二人の獣人を助けたのをきっかけに、外の世界に関わっていく。

プロローグ 前世界と神様

ここは、町郊外にある工事現場、ここでは、大人に混じって中学生の少年が、泥にまみれて働いていた。

「リクトくん、今日はもう上がっていいぞー!」

現場監督が、大きな声でリクトに、上がるように伝える。

「はい」

近くの中学に通う、中学3年生の滝風タキカゼ 陸刀リクトは、監督の好意で、工事現場でバイトをさせてもらっている。遊ぶためではなく、生活費を稼ぐためだ。

8時くらいに帰途についたリクトは、夜の9時を回った頃に自宅に帰ってきた。帰宅途中に、コンビニに寄る。

「ただいま」

部屋に入っても誰の返事もない、当たり前だ一人暮らしなのだから。中学生の身で一人暮らしをしているのは、学校が遠かったからとかではなく、親がリクトを遠ざけるために買ったマンションに自ら引っ越したからだ。

リクトの持つ特殊な力か体質かはわからないが、リクトはこの世界で異常な存在だった。リクトの力を恐れた両親は、小学校5年生の時に、リクトを殺そうとした。しかし殺害は失敗に終わり、それをきっかけにリクトの家は、崩壊を始めた。父はリクトに対して卑屈になり、母は幼い弟の育児を放棄して、外泊が増えた。そこでリク

トから両親に、一人暮らしをすることを条件に、マンションと弟の育児を要求したのだ。

両親でこれなのだ。リクトに友人と呼べるのは一人もいなかった。良くしてくれているバイト先の監督は、ただリクトの異常性を知らないだけだ。

リクトを知る者ほぼ全員が、リクトのことを『化け物』と呼んだ。

リクトの異常性を知って、普通に接してくれているのは、弟の浩太コウタくらいなものだ。

帰宅の言葉が宙に消えたが、心はただ空しいだけだった。

そこには他者に、対する怒りはない。自分の力を、理解しているリクトにとって、自分の力がもつとも忌むべきものだったからだ。他人は、力の表面を見ただけで恐怖するのに、本質まで知ったらどうなるか想像もつかない。

リクトは、コンビニ弁当を袋から出す。いつもは、自炊をしているが、帰りが遅いときはコンビニ弁当にしている。遅めの夕食を済ませると、今度は図書館で借りてきた本を、読み始める。お金のないリクトにとって、唯一の暇つぶしだ。リクトが外で暇を潰そうものならなら、リクトの噂を聞いた不良が集まってくる危険がある。だからバイトも郊外のバイトを選んだし、いつも図書館で本を借りて暇を潰しているのだ。

読む種類は様々で、今は内容の軽い医学書を読んでいる。この前は物語の本、その前は経営学の本、その前は建築関係の本を読んでいた。3年間の読書は、リクトに幅広い知識を蓄積させることになり、これからの人生の助けとなった。

リクトは、読書を切りの良いところでやめ、一人眠りについた。

リクトは、いつの間にか、何もない白い空間にいた。自分が異常な存在なため、不思議なことには、耐性があるつもりだったが、これには驚いた。

「なんなんだ、夢？」

「まあ、そんなところよ」

何もない空間から女が現れた。この時は、驚きより怒りが勝まさった。

「俺の、前に、その姿で現れるな！」

その女の容姿は、小学生時代の恩師のものだった。恩師は既に、亡くなっている。

「ごめんなさい。この人が、もっともあなたに影響力を持った人だったから」

恩師ではないナニかは、身体を回転させて、今度は名前も忘れた、クラスメイトの女子に姿を変えた。

リクトは、またも不思議な現象を見せられ、少しだけ落ち着きを取り戻す。

「何なんだ、あんたは？」

「まあ、あなた達で言うところの神様よ。まあ神様といっても、世界の管理者みたいなものなんだけどね。」

「その神様が何のようだ。まさか、雑談に来たわけじゃないんだろ。」

「そのまさか、実は雑談しに来たのよ。」

「……………」

「コホン。それじゃあ、今から本題を話すわね。」

なかったことにするらしい。自称神様が本題に入る

「あなたには異世界に、行ってもらいます。拒否はできません。行き先はファンタジーな世界です。」

「ま、待て。なんで俺が異世界に行かなきゃならない?」

「それは、本来あなたは、この世界に存在すべき人間ではないからよ。」

存在するべきではない?

「それは、どういう、意味だ」

「本来あなたは、何処かのファンタジー系の世界で、生まれる筈だったの。それがなにかの手違いで、この世界に生まれてしまったの。見つけるのに苦労したのよ。」

「・・・・・・・・」

やれやれといった様子の神様だが、リクトは言葉を無くして呆然とする。

それも仕方ない、神様は、たった今リクトの存在を、全否定したのだ。この世界に、お前の居場所はないとそう告げたのだ。人間に、存在を否定されたことは数あれど、神様や世界にまで、存在を否定されたのは初めてだ。

「元氣出しなさいよ。そのための異世界行きよ。」

確かにそうだろう、今となつては、今の世界に戻るの方が辛い。元々リクトに、居場所のない世界だったのも事実だ。

「それに、この異世界行きは、悪いことばかりじゃないわ。限定的だけど、あなたの力を封印してあげる。」

「ほ、本当か？」

突き落とした後で拾い上げるところに、黒さを感じさせるが、リクトにとって自分の力の封印は、願ってもないことだった。

「ええ、ただあなたの力は生命に、関わるものだから無くすことはできないし、大怪我を負ったりしてあなたの命が危なくなると、封印が解除されてしまうわ。あつ、でも再封印は簡単よ。」

「それでもいい。この力を封印してくれるなら。異世界だろうと行ってやるさ」

「それでは、乗り気になったところで、行き先の説明をするわね。これから行く世界では、全ての生き物にステータスカードというものがあるって、『カード・オープン』と唱えると、あなたの詳細が書かれたカードが、その場に出てくるの、消すには『カード・クローズ』よ。これは、あなたただけだけど『カード反転』で本来のあなたの力が表示されるから気をつけてね。私から言えるのはこれだけ。心の準備はいい?」

「俺に選択権はないんだろ」

「そう、ね。両腕を貸して封印を施すから。」

神様は一瞬悲しそうな顔を見せるが、すぐに両腕を所望する。

両腕を神様の手がある位置に持つていく。すると両腕を掴まれ次に瞬間、両腕に燃えるような熱が走る。

「うっ、があああ、あああ……があ……はあ……はあ」

熱が引いたとき、腕には禍々しい黒い刺青が刻まれていた。その刺青も時間が立つと消えた。

身体のがんがんがんがんと違う。どうやら力は、しっかり封印されているようだ。確認のために

「終わったのか?」

「終わったわ。再封印は、両腕の刺青に触れて心の中で『封印』って念じればいいから、簡単でしょ」

「わかった」

「それじゃあ、そろそろ異世界に送るわね。あつ、会話と読解はサ
ービスしておくから。」

リクトの周りが白から黒に変わっていき、どんどん暗くなっていく。
次第にリクトの意識も薄れていき

「良き人生を優しい化け物さん。」

神がそう囁いた。そこでリクトは、意識を失った。

プロローグ 異世界と化物

リクトが、次に目が覚めた時には森の中だった。

そんな中、リクトは神様の言葉を、思い出していた。神は「良き人生を優しい化け物さん」と言っていた。

この世界は化け物でも、いい人生が歩める世界なのだろうか？
考えても答えがでるはずもない、リクトは一旦忘れることにして、
辺りを見回す

「異世界か、草木は前の世界とあまり変わらないな。」

というか草木しかない。

「そういえばステータスカードがあるとか、なんとか言ってたな。
試してみるか『カード・オープン』」

白い板状のカードが、宙に出てきた。

シン・タキカゼ

LV1

種族 人間 男

クラス なし

筋力 2

耐久 2

敏捷 2

知覚 3

魔力 1

職業 なし

技能 全言語対応
装備

布の服
革の靴

まるでゲームの初期設定だな。

「『カード・クローズ』」

カードを消しす。さてこれからどうするか、辺りに人の気配はないし、自分から人に会いたいとは思わない。ならまずは、衣食住の確保からだな。

それには常識がいる、この世界の常識が。ファンタジーな世界と言っていたから、科学は期待できないだろう。となると情報源は、人か本の可能性が高い。

憂鬱だ。リクトは、その異常な力のせいで人に避けられていたため、会話を中心としたコミュニケーション能力に、かなり問題があることを自覚している。

「人を探さないといけないのか、はあ」

リクトは、ため息をつきながら歩き始める。

一時間経過

小さな池にたどり着いた。ここに来るまで人には会っていない。

「もしかして、この辺りに人はいないのか？」

池の畔で休憩していると、森から何か飛び出してきた。

一角獣ユニコーンに、酷似した生き物だった。白い馬体で、頭には渦巻き状の角がある。この先は、一角獣と呼ぶことにしよう。

よく見ると一角獣の後ろ足に、矢が突き刺さっている。

続いて森から武器を持った男達が出てきた。男達の内、何人かがボウガンを持っているから、一角獣に刺さっている矢は、こいつらの仕業だろう。

「ようし追い詰めたぞ。ここなら遮蔽物はない。野郎ども仕留めるぞ」

ボウガンを構える男達。前の世界の感覚で、その前にリクトが立ち塞がる。

「止める！」

動物はリクトを恐れない。どちらかという人よりも、動物の方が好きなくらいだ。

「何でこんなところに、こんなガキがいるんだ？」

「おい、どうすんだ？」

「こっするしかないだろ。」

剣を持った男がリクトに近づき、胸を一突きされた。リクトは、その躊躇のない動きに、避けるのを忘れてしまった。

ドサッ

リクトの身体が、剣が刺さったまま、その場に倒れた。

「おいおい、いいのかよ」

「いいんだよ。どうせ密猟の現場を見られた時点で、逃がすわけにもいかなかったしな。」

「確かにそうだな。それにしても、何でこんなところにガキがいたんだ。」

「さあな、まあ、どうでもいいことだ。」

こいつら密猟者か、なら悪人だな。それも、人の命を簡単に奪うような人間達らしい。

リクトは、男達の声が聞いていた。心臓を貫かれたのに生きているのだ。

さっき見た感じだと男は7人ぐらいだった。どうやってこいつらを追い払うか考えていると

両腕に、黒い刺青が浮かんできた。リクトの異常に気付いた、密猟者が指差す。

「なんだ、あれ？」

密猟者に気付かれたので、リクトはその場に立ち上がる。その胸には、剣が刺さったままだ。

「ひい、な、なんだこいつ」

「生きてんのか？」

「嘘だろ、胸に剣が刺さってるんだぞ！」

リクトは、胸から剣を引き抜き右手に持ち、男達の方に歩いて向かって行く。リクトは、驚いて逃げてくれるのを、期待したのだが。

「うっ、……うああああ」

恐慌状態に陥った、一人の男がリクトに、襲い掛かってきた。他の男達も釣られて攻撃しようとする群がってくる。リクトは、大振りの攻撃を難なく避け、胴に剣を叩き込んだ。男はあっさり死んでしまった。次の男も、同じように攻撃を、避けて腹を斬った。

それを見た男達は左右から攻撃を仕掛ける。リクトは、左右からくる剣を、右手に持つ剣と左手で受ける。

「なっ」

「何だ、そりゃあ」

素手で剣を、掴むような形で受けた左手は、肉が裂け夥しい血が流れ落ちる。リクトは、一切気にせず右側の男の腹を蹴り飛ばし、空いた右手の剣で、もう片方の男を斬り殺す。リクトは、自分の血で汚れ、持ち手のいなくなった剣を持ち直して、さつき蹴って、地面に転がったままの男に投げつける。剣は男の喉に突き刺さり、男は息絶えた。

残ったボウガンを持った男三人は、呆然と突っ立っていた。

リクトが、剣を三人の前に投げつけると

「ひっ、ひいい、た、助けてくれ。」

「ば、化け物だ。逃げるー。」

「あんな化けものの、相手なんかできるか」

三人は、その場を逃げ出した。リクトは、その三人を追わずに見送

った。

化け物か、結局俺は、この世界でも化け物なんだな。その証拠に、回復も異常な速さだった。すでに胸の傷は癒え、左手も、もう血は止まっている。

リクトは、ほとんど癒えた左手を見ながら

「『カード・オープン』、『カード反転』」

白いカードが出てきて、反転の言葉でカードが、真っ黒になり、字が白になった。

シン・タキカゼ（裏）

Lv3

種族 人間 男

クラス 人喰らい《マンイーター》

筋力 32

耐久 33

敏捷 30

知覚 34

魔力 21

職業 なし

技能 高速再生 命の蓄積 痛覚鈍化 全言語対応

装備

布の服

革の靴

人喰らい《マンイーター》、人を喰らう化け物か。予想はしていた。前の世界でも、リクトが初めて人を殺して以降、身体能力が急に上がったのだ。だから、わかっているつもりだった。だが、こうして

事実を突き付けられると、さすがにキツイ。

どうやら俺は、人間を殺して強くなる人間。人類の敵ってわけだ。

それにレベルの割りには、能力値が異様に高い。そこからもリクトが、この世界でも、異端なのは明らかだ。

「『カード・クローズ』」

リクトは、カードを閉じると、池に入って返り血を洗い落とす。そのときに黒い刺青に気付き、腕を組むようにして、心の中で、封印を念じて再封印をする。黒い刺青は、綺麗に消えた。

再封印が終わると、一角獣ユニコーンの存在を思い出した。一角獣は、歩けないのか、池に座りこんでいた。リクトは、近づいて行き。

「言葉は、わかるか？」

「【不思議だ。普段は、意味はおぼろげなのだが、君の言葉の意味は、はつきりとわかる。君は何者だ？】」

会話が出来た。そういえば、会話と読解は、サービスとっていたな。どうやら人間以外にも、有効らしい。

「俺は、滝風タキカゼ 陸刀リクト。さっきの奴らが言っていた通り、化け物だよ」

「【奴らの言葉は、よく解らなかつたが、私は君よりも、密猟者の方が嫌いだな。私は、一角獣ユニコーンのスレイ。そういえば礼を忘れていた。助けてくれて、ありがとう】」

一角獣で、合っていたようだ。

「【どうしのだ?】」

リクトの目から、涙が流れていた。

「えっ」

リクト自身、自分が泣いていることに、気付いていなかったようだ。

「いや、何でもない。」

久しぶりだった。誰かを助けて、礼を言われたのは。

リクトは、涙を拭き取って

「それよりスレイ、矢を抜こうと思うんだが?」

「【頼む】」

「了解。ちよつと待ってる」

リクトは、死んだ密猟者の服を剥ぎ取り、それを池で綺麗に洗ってから、スレイの近くまで持って来て。

それから矢を引き抜き、傷口を服を切り裂いて作った包帯で巻いて、応急措置をした。

「【何故、君が化け物と呼ばれる? 私には解らない】」

「人間は、自分とは違うものを、排除しようとする、生き物だからな。それに俺の力は、確かに化け物さ」

「【力は使い方しだいだと思うがね。】」

「それが真実でも、俺は人には受け入れられないと思う。」

リクトには、前の世界で、人を助けた時に、怖がられた経験がある。スレイの言葉を、受け入れることはできなかった。

「【そうか】」

悲しそうに目を伏せるスレイ。

「【……リクトよ、私は君に恩ができた。何か礼をさせてくれ。】」

「なら、この世界の常識を教えてくださいませんか？」

「【常識？構わないが、私は一角獣^{ユニコーン}だ。あまり人の常識には、詳しくはないぞ。それより人里に、行かなくていいのか？】」

「人には……会いたくないんだ。」

「【……わかった。だが、それだけでは、命を救ってくれた礼には、不足だろう。リクト、私の主になってくれないか、私は君が気に入った。】」

「一角獣は、女性を好むんじゃないのか？」

「【それは、知っているのか。まあ、気にするな。私は変わり者なのだ。それで、ダメかね？】」

「ありがたいよ。スレイの主、やらせてもらっよ。」

「【これから、よろしく頼む。主よ】」

「よろしく。そこで相談なんだが、田舎暮らしでもいいか？」

「【何処でも構わない。主の好きなように】」

「田舎でのんびりするだけだぞ」

「【主は、人に会いたくないのだろう。田舎でのんびり、多めに結構。いっそ山奥で暮らすのもいいだろう。】」

スレイは、リクトのことを優先してくれるようだ。

「ありがとう」

この後、スレイが動けるようになると、リクトとスレイは、山奥に姿を消した。

1話 迷子の獣人

リクトが、この異世界に島流しされてから、三年の時が流れた頃。二人の冒険者が、山の中をさ迷い歩いていた。

「お腹空いた」

「そうね」

「どこどこだろうっ?」

「さあ」

「………はあ」

「ミーシャ、元気出して」

「なんでクーラは、落ち着いていられるのよ。もう私達、丸一日なにも食べてないのよ。」

「これでも、焦ってるわ」

そう返事をした本人の顔は、少しだけ、眉が下がっている気がする。

「迷ってからもう3日、食料も無し、さすがに私も焦るわ。」

「確かに、そうよね。」

只今、絶賛迷子中かつ空腹の二人は、獣人の女冒険者だ。

落ち着いている方が、銀色の犬耳にロングの銀髪、青い眼をした獣人で、まだあどけなさを残す少女だ。名前はクーラ。気落ちしている方は、黒い猫耳にショート黒髪、黒い眼をした獣人で、活発そうな少女だ。まあ、今は空腹で元気がないが。名前はミーシャ。

「魔物もないし、どうなってんのよ」

「誰かが全部駆逐したのかも」

「それにしたって、動物すらいないのはなんでなのよ。」

この山に入ってから、ほとんど動物を見ていない。いないわけではないのだが、自分達の前に姿を見せないのだ。

「ミーシャ」

その時、クーラがミーシャを呼んで、何かを指差した。

「何？」

「あれ」

クーラが指差した先には、小熊2頭が戯れていた。小熊を見たミーシャの、目付きが変わる。

「クーラ、火の準備お願い。」

「任せて」

普段なら小熊の可愛らしさに、躊躇するところだが、初めて見つけた食料で、さらに二人の空腹は限界にきていた。小熊を見つけた瞬間、二人は、狩ることに決めた。

ミーシャが、腰の剣を抜いて走り出す。猫の獣人特有の瞬発力を活かして、間合いをつめる。

小熊の側まで来たミーシャが、小熊に剣を降り下ろす。

今にも、小熊の命を奪おうとしていた剣を、別の剣が受け止めた。

「なっ！？誰！」

剣を受け止めたのは、両腕を黒い包帯で巻き、黒衣を纏った男だった。

剣と剣がぶつかる音に、驚いた小熊は、逃げて行ってしまった。

「あ~~~~、あんだ、何すんのよ！」

ミーシャが、男を睨み付ける。

「あれは、子供だ。」

「うっ」

正論だ。

「し、しかたないじゃない。こっちは、丸一日なにも食べてないのよ」

「腹が減ってるのか？……森を、出ればいいだろ。」

「え、えっと、その、迷ったのよ」

後半になるにつれ、ミーシャの声が小さくなる。

「……」

「ちょっと、何か言いなさいよ。」

「……はあ、わかった。付いて来い。」

「ため息つくなー！。それに、何わけわかんないこと言ってるの。誰があんたみたいなの、怪しいやつに」

「ミーシャ」

「何よクーラ！」

「落ち着いて。このままだと、私達、迷子のままよ」

「うっ」

確かにそうだ。

「それに」

「それに？」

「早く追わないと見失う。」

男は、さっさと、先に進んでいた。

「ちよつとー！」

慌てて男を、追いかける二人。

「ちよつと、待ちなさいよ。」

男が、立ち止まって振り返った。

「なんだ？」

「へっ？えつと」

「あなた、名前は？」

止めていながら、返答があると思っていなかったミーシャは、戸惑ってしまつた。そこに、クーラが男の名前を尋ねた。

「俺は、リクト・タキカゼ、隠棲中の冒険者だ。」

「「隠棲中の冒険者？」」

訳が分からないといった感じの二人をおいて、リクトはまた歩き出してしまった。

「ねえ、私達も名乗った方がいいのかな？」

「あの人は、別に望んでいないみたいよ」

「そうよね。私達を置いて、どんどん先に行っちゃおうし」

「今は、大人しくついて行きましょう。その内、会話することもあるでしょうし」

「そうね」

二人は大人しく、リクトについて行くことに決めた。

全く会話のないまま、三人は進み開けた場所に出た。そこにログハウスが建っていた。

「家がある。」

「あ、あんた、こんなところに住んでるの？」

「そうだが」

リクトは、それだけを答えて家に、進んでいく。リクトが、ログハウスの近づくくと、周りの森から動物達が姿を現した。ウサギ、リス、小鳥などの小動物から、牛、羊などの牧畜までがリクトの近くに集まってきた。中には鷲や熊などの猛獣もいる。動物達は、リクトに身体を擦り付けたり、顔を舐めたりと、じゃれ付いていた。

リクトが動物達と戯れる光景は、浮世離れしていて、とても暖かい。まるで、その場だけ時間が緩やかに流れているようだった。クーラとミーシャは、啞然としながらも、その光景に引き込まれていく。

「何をしてる？早く来い」

リクトの声に、二人は夢心地から引き戻される。

ログハウスに進む時、動物達にじろじろ見られて落ち着かない様子の二人だ。

ログハウスの近くに着くと、ログハウスの陰から、一角獣ユニコーンが現れた。

「一角獣!?!」

「主、このお嬢さんたちは?」

「喋った!?!」

「迷子だ」

「ぶっちゃけるな!何か他に言い方があるでしょ!」

ぐ~~~~~x2

頬を染める、獣っ娘の二人。

「腹が空いているらしい」

「そこは、いいから!」

「主、からかうのは、やめなされ。」

「そつだな。二人ともどうぞ」

「ぜえぜえ」

リクトは、二人を中に招き入れた。ミーシャは、叫びすぎて息切れしている。

「モーリー、ミルクを二人に出してやってくれ。俺は、何か適当に作るから。二人は、そこに座っていてくれ。」

リクトがモーリーに指示を出す。またしても二人を驚かせた。モーリーとは、おサルだったのだ。エプロンを着たサルが、二人の前にミルクの入った木製のコップを持ってきて、テーブルに置く。さらに、椅子まで持ってきてくれた。

「どうも」

クーラは、テーブル近くの椅子に座った。

「クーラ、ここは流すところなの！」

「ミーシャ、・・・私、そろそろ驚くのやめよつかと」

どこか達観した様子のクーラだった。

「そ、そうね。そうしましょう」

ミーシャも椅子に座る。そこに

「【お嬢さん?】」

スレイが、窓から顔を入れてきた。

「うひゃ」

さっそく驚いているミーシャ。

「【おお、すまない。さっきのことで訂正を、私は喋っているわけではなく、首につけた魔法具が翻訳しているだけなのだよ。それを言おうと思っただね。それに元々ここが、主が家にいる時の、定位置なのでね。】」

一角獣の首に、首輪状の魔法具が付いていた。呪文が書かれた装飾のない簡素な作りだ。

「どうして、喋るの？」

「【主は、人との対話が苦手だね、私が喋れた方が都合がいいのだ。】」

「ほうほう」

「なんでクーラは、そんなに順応しているのよ〜」

二人と一頭が、雑談？していると

「できたぞ。」

そう言って、テーブルに、パンとジャム数種、ハムエッグ、腸詰め、チーズ、サラダ、コンスープ、果物数種が並んでいく。

テーブルに並ぶ食べ物に、クーラとミーシャが目を輝かせる。

「「食べてもいいの(ですか)?」」

二人が同時に、リクトに問いかける。

「どうぞ」

「「いただきます」」

すごい勢いで、二人は食べ始めた。

「おいしい、このパン焼きたてだわ」

「モーリーが、焼いたパンだよ」

「サ、サルが、パンを焼くの?」

「そうだよ。俺が教えた。」

「【今並んでいる食事のほとんどは、主が作ったものだよ。ジャムもチーズも腸詰めもね】」

「ほんと?」

今度は、クーラが驚く、チーズや腸詰めの完成度に驚いたのだ。

「冒険者なんだよね?」

「隠棲中のな」

隠棲した者を冒険者と呼んでいいのか、クーラには、いまいちわからなかった。

物思いに耽っていると、テーブルの上の食べ物を、ミーシャにどんどん食べられていくことに気付いた。クーラは、考え事をやめ、食事に集中することにした。

2話 食後の自己紹介

しばらくして食事は終わった。

「「「ちそうさま」でした。」」

「おそまつさま」

モーリーが食器を片付け、リクトが紅茶を入れる。焼き菓子もセツトだ。

「わあ〜」

ミーシャが嬉しそうな声をだして、お菓子に手を伸ばす。リクトは出会った頃が嘘のように親切だ。どちらが本当のリクトなのだろう？
クーラは、この不思議な男のことを知りたい気持ちだが、どんどん強くなっていく自分に気づいた。

「あの、リクトさん、どうして、ここまで？」

「俺が招待したんだ。持て成すのは最低限の礼儀だろう。不服か？」

「い、いえ、そんな」

「【主、そう意地悪しないでも】」

「あの、本当にありがとうございます。とても美味しかったです。あの、よろしければ、ステータスカード見せ合いませんか？」

「・・・まあ、いいよ」

「それでは、ほらミーシャも出す。『カード・オープン』」

「ほーい『カード・オープン』」

「『カード・オープン』」

「どうぞ」

クーラが、ミーシャのカードも取って二つとも渡してきた。

クーラ・ポートルアモン

Lv 8

種族 獣人 女

クラス 魔法師

筋力 13

耐久 8

敏捷 13

知覚 20

魔力 29

職業 冒険者

技能 初級風系魔術 中級氷系魔術

装備

銀杖

白いマント

布の服

皮の靴

ミーシャ・ミレンシ

Lv 8

種族 獣人 女

クラス 獣戦士

筋力 19

耐久 11

敏捷 29

知覚 18

魔力 6

職業 冒険者

技能 半獣化 初級剣術

装備

鋼の剣

皮の鎧

布の服

皮の靴

おかしい、この世界のステータスは、レベル×10＝能力値の合計のはずだ。彼女達のレベルは8なので、合計は80のはず、なのにステータスの合計は83になっている。クラスや装備が関係しているのだろうか？

シン・タキカゼ

Lv 12

種族 人間 男

クラス なし

筋力 25

耐久 24

敏捷 25

知覚 34

魔力 12

職業 冒険者

技能 初級拳闘 初級剣術 初級炎系魔術 全言語対応

装備

ダマスカスの剣

黒衣

皮の靴

黒い包帯

「クラス無し？」

「ああ、良くわからないんだ」

「えっ？」

クーラが驚きの声を出す。そしてリクトを伺うようにしながら

「その、神殿で簡単に追加、変更ができますよ。それにクラスを設定すると、ステータスや魔法の威力にボーナスが付きますから、設定しなのはもったいないですよ。」

「そうか」

リクトの反応が薄い。なにか悪いことを言ったのだろうか、とクーラがおろおろしていると。

「【すまないな。主に悪気はないのだ。ちょっと人間不信だね。打ち解けるのに時間がかかるのだ。】」

「おい、スレイ」

「【そうだろう。アメリカ殿の頼みだって、最後には聞いたではないか。】」

「うぐ」

苦い顔をするリクト。

「ねえねえ、全言語対応ってなに？」

「誰とでも話せるんだよ。口から言葉を喋れるなら、誰とでも人も動物でもね」

「すごい、それで動物達とあんなに仲がいいんだ。もしかして私達に動物達が近づかなかったのも」

「俺が、俺以外の人間に近づかないように教えている。それよりあなた達」

「むつ、名前で呼んでよ。カードに書いてたでしょ、あたしは、黒猫獣人のミーシャ、よろしくね。」

「私は、銀狼獣人のクーラです。その、名前で呼んでもらえませんか？」

上目遣いのクーラが、とても可愛かった。

「わかった。名前で呼ぶよ。それで、ミーシャとクーラは、これからどうするんだ？」

「【主、そこは送ってやるくらいの事が、言えないのかね】」

「無茶言つな。このあと、用事があるのは知ってるだろ。」

「そうなのですか？」

「ああ、まあな。予定が合わなくても、動物達に麓まで送らせるから、帰りのことは気にしなくていいぞ。それでこの後の予定は？」

「【主は、これでも君達のことを気にしているのだ。】」

スレイが茶々を入れる

「スレイ、お前は少し黙れ」

「え、えーと私達は、王都を目指しています。」

「王都を目指していて、何でこんなところで迷うんだよ。」

「ミーシャが、近道をしよう」と

「ちょ、ちょっとクーラ！あんた、今日は良く喋るわね。」

「そ、そんなことはないわよ」

二人とも、何故か顔を赤くしている。何が恥ずかしいのだろうか？

スレイは、（主は、自分の前だから、とか考えないのだろうか）と
思っているが、口にはせず、ほかの事を口にする。

「【ちょうどいい。王都になら、我々も行く予定だ。転移門ゲートを使うから時間も短縮できるぞ。】

「門が使えるのですか!？」

転移門とは、大きな町に設置されている、門と門の間を瞬間移動できる門のことだ。門は、悪用されないように厳重に管理されていて、通行証が必要になる。一日限りの通行証を手に入れるのにも、厳正な審査が行われるため、一般人はあまり利用できない。門を日常的に使えるのは、国の要人だけ、というのが現状だ。クーラが驚くのも仕方がない。

「クーラだって、結局驚いてるじゃない。」

「すごさのわからないミーシャは、あまり驚いていないようだ。」

「それより、同行させてもいきましょうよ。転移門がつかえたら、王都なんてすぐじゃな。」

「転移門まで三日かかるがな。それまで一緒に行動するつもりか？」

「私は構いません。リクトさん、良い人みたいだし。」

クーラが、リクトを見て微笑む。それを見たミーシャが、

「おお、クーラが笑ってる珍しい。まあ私も、変わってるけど、リクトが良い人つてのに、異議はないわね。」

「……勝手にしてくれ。」

「【照れておるのだ】」

「スレイ、窓をしめるぞ」

「【主、このお嬢さん達は、主のことを純粋な目で見てくれている。よき友人になれるやも知れん。そこで、主を売り込もうかと】」

「あれのどこが売り込んでいるんだ？」

「【主は、誤解されやすい言動を取る癖が、おありですからな。】」

「・・・勝手にしろ。俺は、動物達に挨拶してくる。戻ってくるまでに準備をしておけよ。」

リクトは、家を出て行った。

「【逃げられましたか。まあいいです。それでは、許しも貰ったところで、主のことを簡単に説明しようと思うのですが、…………聞きたいですか？】」

「「聞きたい（です）」」

クーラとミーシャは、獸耳を立てて興味津々のご様子だ。

「【まず、先程の食事、主が作ったと言いましたが、実は、この家も、椅子、テーブル、食器、ベットまで主の手作りなのです。】」

「「本当^{ですか}？」」

「【主は、幅広い知識をお持ちで、さらに手先も器用でしてな。あ

らゆる物を自作してしまうのです。どうです、すごいでしょ。料理も得意ですし、優良物件ですよ。】

「確かにすごい。」

「なんだか、ここに来てから驚いてばかりだよ。」

「【そして、ここだけの話、主は心に深い傷を負っていてな。詳細は話せませんが、そのせいで、人間不信なのだ。だからというわけではないが、主と仲良くしてくれまいか？そして本当の主を知っても嫌にならないでいてくれると、わたしは嬉しいのだが、そこまでは望まない】」

スレイが真面目な雰囲気ですう話した。それに、ふたりも真剣に答える。

「仲良くするのは、問題ありませんよ。リクトさんには恩がありますし、個人的に興味もありますから」

「あたしもいいよー。最初は何だこいつって思ったけど、ご飯は美味いしかったし、それに、動物達といる時のリクトの顔、とっても優しい顔してた。あの顔を近くで見たいし」

「最後だけ聞くと、まるで告白ですね。」

「ち、違うわよー！」

ミーシャが立ち上がって否定してくる。かなりの慌てようだ。逆に怪しい。

「わかってる。それに、私もあの表情を、私に向けて貰いたいとは思ったしね。」

「【おお、では、二人とも主の恋人候補ということですか。】」

「な、なな、何でそうなるんですか!」

今度はクーラが立ち上がって、スレイに問いたです。

「【主のあの顔を見たいのなら、恋人ぐらいにならないと厳しいですぞ】」

「うっ、マジ?」

「・・・考えておきます。」

「ちょっとクーラ!」

「【それでよい。考えるのは、自由じゃ。ただ】」

「ただ?」

「【生半可な覚悟で、主にちょっかひを出すのは、私が許さないの
でそのつもりで】」

ゴクッ

それまで人のよさそうな雰囲気だったスレイが、本来の聖獣の空気を纏って二人を威嚇した。

「わかったわ、それも肝に銘じておきます。」

「りよ、了解」

元のやわらかい雰囲気に戻ったスレイが

「【すまん、主は、繊細な心の持ち主でな。それに私の恩人でもある。あまり主の泣き顔を、見たくないのだ。】」

その言い方だと、泣き顔を見たことがあるということだ。

「【この話はこれまで、何か聞きたいことはないかね。】」

「リクトさんのことは自分で聴いて見ます。なのでリクトさんとスレイさんの馴れ初めを聞かせてくれませんか？」

「【構わんが、色々話せない部分があるから、結構省くぞ】」

「構いませんお願いします。」

二人に、リクトとの出会いをスレイが話し終えた頃に、リクトが戻ってきた。

3話 クラス

リクトがログハウスに戻って来ると、すぐに出発することになった。リクトがスレイの身体に、荷物を括り付けていると、モーリーが外に出てきてお辞儀をする。

「ウキキ（【行ってらっしゃいませ】）」

「ああ、家のこと、頼んだぞ。」

リクトとサルのはきは、横から見ていると、とてもシユールだ。普通の人たちには、サルの鳴き声にリクトが真面目に返しているようにしか見えない。

「ウキ（【任せてください】）」

「行ってくる」

三人と一頭は、ログハウスを出発した。

山からは、30分ほどで出られた。

「こんなに、簡単に出られたの」

「私達は、何をしていたのでしょうか」

獣人娘の二人は山の出口で、項垂れている。

「……………それについては悪かった。」

リクトが、気まずそうに言うと、二人が顔を上げて

「「はい？」」

「……………何も知らない人間は、山の奥に行けないようにしているんだ。君達が、一日迷ったのに関係しているかもしれない」

「えっ、……………あんたのせいだったの！」

「別に外に、向かう分には問題ないはずなんだが。」

「むっ」

ミーシャがむくれる。実際に30分ほどで外に出られたのだ、リクトの言葉は本当なのだろう。

「ど、どうやっているんですか？」

「木や獣道を使って、人を誘導したり、登っている気がするように錯覚させたり、と色々な。」

「リクトさんって、できないことってあるんですか？」

「そりゃあ、いろいろできないことはあるさ。設備が必要なものは無理だし。」

「設備って時点で、次元が違いますよ。」

この頃になるとクーラの視線には、少し呆れが混じっていた。

「それより、この後はどうするのよ？」

「近くの町に泊まって、明日から本格的に移動だな。」

「それなら、町に着いたら、神殿に行きましょう。そして一緒に、クラスを決めましょう。」

クーラが、リクトの手を握って念押ししてくる。

「あ、ああ」

「あっ」

リクトに接近しすぎていることに気付いて慌てて手と放す。

「今日のクーラは、積極的ねえ・・・ムフフ」

「なっ」

ミーシャが口を猫みたいにして、クーラをからかう。顔を真っ赤にして、恥ずかしがるクーラは、とても可愛らしかった。

「ねえねえ、リクトって、いつもは何やってるの？」

「いや、これといって、なにも」

「【主は、いつも動物と戯れるか、新しい料理に挑戦している。いつか振るってくれるかも知れんぞ】」

言葉を濁すリクトの代わって、スレイが質問に答えた。

「それは、本当に楽しみですね」

「えっ、さっきのご飯は？」

「【あれは、手抜きをしたわけではないが、あくまで有り合わせだよ】」

「ほうほう、・・・リクト楽しみにしてるよ。」

「まあ、それまで俺と仲良くできていたらな」

「「?」?」

リクトの意味深な言い方に、首を傾げるミーシャとクーラ。

「いや、なんでもない」

その場を誤魔化したリクトを、スレイが何か言いたそうに見るが、結局最後まで黙っていた。

「さあ、早めに町に着きたい。早く行こう」

リクトが地図を出しながらそう口にして、三人と一頭は歩き出した。近くの町には、日が出ている内に、着いた。

「さあ、リクトさん神殿に行きましょう。」

クーラに、右腕をとられ

「いや、先に、宿屋に」

「いいから、いいから」

ミーシャに、左腕をとられた。

二人の女性に腕を掴まれて、連行されていく。二人とも美少女と呼ぶにふさわしい女の子だから、両手に花状態のリクトに向けられる視線には、嫉妬が多分に含まれており、とても視線が痛い。それに女性と腕を組んだのは初めてで、リクトは少なからず動揺していた。

「着きましたよ。リクトさん。どうしました？」

顔が少し赤いリクトを不思議そうに見るクーラ。

「いやなんでもない。それより腕を離さないか？」

「あつ、そ、そうですね」

クーラは、言われて初めて、腕を組んでいることを意識したらしい、慌てて腕を解放する。クーラが放すと、ミーシャも腕を放した。

「今日は、どういったご用件でしょう？」

そうこうしていると、神官の女性が近づいてきた。

「クラスの、追加をしたいんですが。」

「初めてですか？」

「はい。そうです」

「わかりました。どうぞこちらへ」

三人は、奥の部屋に通された。その部屋の床には魔方陣が描かれていて、リクトはその中心に立たされた。

「では、『天の神々よ、この者に適正あるクラスを、ご揭示ください。』」

神官が祈りを捧げると、神官の前にステータスカードに似た白い板が現われた。白い板には、いくつかの文字が書かれているようだ。

「これが、クラスカードです。こちらを見てください。」

神官が、出てきたクラスカードをリクトに見るように進める。キラとミーシャも、カードに書かれている文字を見に来る。

クラスカードには

選択可能数 2

選択可能クラス

剣士 拳士 戦士 従士 獣使い 魔法使い

「いろいろ、ありますね」

「すーい」

何を選べばいいのが全くわからないので、聞いてみるか

「何を選択したらいいと思う?」

「そうですね。今は動物を連れていませんし、剣士と拳士でどうですか?」

「じゃあそうするか。この選択可能数っていうのは?」

「レベルが10増えるごとに、選択できるクラスが増えるんです。ついでに言うと、職業の方はいくつでも追加できますが、多くても三職くらいですね。」

「ありがとうございます、クーラ」

「どういたしまして」

「それじゃあ、剣士と拳士をお願いします。」

神官の女性に選択するクラスを伝える。

「わかりました。ステータスカードを、よろしいですか」

「『カード・オープン』」

シン・タキカゼ

Lv12

種族 人間 男

クラス なし

筋力 25

耐久 2 4
敏捷 2 5
知覚 3 4
魔力 1 2

職業 冒険者

技能 初級拳闘 初級剣術 初級炎系魔術 全言語対応

装備

ダマスカスの剣

黒衣

皮の靴

カードを神官に渡す。

「それでは、追加しますね」

ステータスカードの上にクラスカードをかざして、神官が何かを祈る。するとステータスカードは、次のように変わった。

クラス 剣士 拳士

筋力 2 5 < < 2 7
耐久 2 4 < < 2 6
敏捷 2 5 < < 2 6
知覚 3 4 < < 3 5
魔力 1 2 < < 1 2

大した苦労もなくステータス値が上がってしまった。便利な世界だな。

「同じクラスをずっと使っていると上位のクラスが追加されたり、何か条件を満たすと、クラスが増えたりします。獣使いなんかが良い」

い例ですね。獣使いは、動物と仲が良い人だけがなれるクラスですから。」

「へえ」

クーラは、選択可能数といい、どうやら説明好きらしい、色々この世界のことを教えてくれるのは、異世界から来たリクトにとってありがたい。

「次は、宿屋に行きましょう。」

どうやら、あまり常識を知らないリクトに、色々と教えることができて、嬉しいらしい。町に来てからのクーラは活き活きしている。しかし、宿屋で問題が起きた。

「部屋がない!?!」

「はい、申し訳ありません。今日はもう、三人部屋がひとつだけ空いているだけでして。」

三人部屋に恋人でもない男女が一緒の部屋に止まるのは問題がある。しかし、この町は、あまり大きくないので、宿屋はここしかない。だから、リクトは早めに来たかったのだが。神殿に行きたがっていた二人を強く止めることができなかった。

「ごめんなさい、リクトさん」

「ごめん」

神殿に行くことを押し通したからだろう、クーラとミーシャが落ち込んでいる。

「いや、知ってて強く反対しなかった俺も悪いんだし。今日は俺が野宿するよ。」

「ダメです！恩人のリクトさんを野宿なんてさせられません。それにやっぱり原因は私達にあるんですし、ここは私達が。」

「それはダメ。それじゃあ、俺がゆっくり休めない。」

女を野宿させて、ぬくぬくとベット寝られるような神経は持ち合わせていない。

「それじゃあ、えっと、えっと」

「クーラ、ちょっと」

ミーシャが、クーラに何か耳打ちをする

「じょよーじょよーじょよー」

「いいのね」

「うん」

「リクトさん」

目が本気だ。ただ、ミーシャが横でニマニマしているから、碌なことにならない気がする。

「な、なんだ？」

「私達とお泊りしませんか？」

クーラが、大きな声できわどい事を言った。あらかじめ言うておくが、ここ場には他の客も結構いる。特に男達が聞き耳を立てている。是でも否でも、騒ぎになりそつだ。リクトが答えられないでいると

「私達なんかと、一緒は嫌ですか？それなら私達は野宿します。」

いつの間にか、否と言え、女の子を外に追い出すことになってしまった。今度は、周りから女の視線も加わって逃げ場がなくなる。

「わかった。一緒の部屋で頼む」

「はい」

周りの男供が、騒ぎ出すが無視する。

今日一番の笑顔のクーラの横で、ミーシャが腹を抱えて笑っていた。クーラは、何故ミーシャが笑っているのか、わからないようで、首をかしげている。クーラには、少し天然が入ってるかもしれないな。

部屋に入ると、そのミーシャの笑顔が固まった。部屋には、キングサイズのベットが一つだけだったのだ。

そりゃあ、空いているはずだ。だれも使いたがらないだろう。三人のサイズのベットを使うことが普通は無い。宿屋の方はどういうつもりで、この部屋を作ったのだろうか？

「リクトさん、私達汗を流してきますね。」

クーラは、この状況に全く動じていなかった。固まったままのミー

シヤを連れて浴場の方に向かっていった。

リクトも、風呂に行くことにする。もちろん男のリクトの方が入浴の時間は短いので。すぐに上がって、部屋に戻ってきた。

「楽しかったな。」

クーラとミーシャは、まだ入浴中だし、スレイは、外の厩舎にいるため、ただの独り言だ。

人と、一緒の時間を、過ごすのは久しぶりだった。

二人との会話も、神殿に引きずられて行ったのも楽しかった。スレイの言った通り二人ともいい子達だった。

だからこそ、人喰らい《マンイーター》のことを知られるのが怖い。だが、知ってほしいとも思う。もしかしたら知っても、拒絶されないかも知れないと、この世界に来てから思えるようになった。

今は、まだ無理だが

「いつかは」

「何がですか？」

クーラとミーシャが戻ってきた。風呂上りで、クーラの銀髪はキラキラ輝いていて美しい。ミーシャの黒髪は、しっとりしていて色っぽい。

「明日のこともありますし、もう休みましょうか。」

「そつだな」

「ちょっと待って、寝る配置は、どうするの？」

「それはもちろん。」

クーラが自信満々に、提示したのが

クーラ・リクト・ミーシャ

の順番だった。クーラのが、よくわからなくなってきた。

「どうして、リクトが真ん中なの？」

「不公平を無くすためよ。他にいい配置がある？」

「リクトは、いいの!？」

「別に構わない」

「そ、そっか。じゃあしょうがない、寝ましゅ、寝ましゅか。」

キョドリまくりのミーシャ。

(二人が寝たら、抜けだそう)

三人川の字でベットに入る。

「おやすみなさいリクトさん。」

「おやすみリクト。へ、変なことしたらダメだからね。」

クーラは、腕を組むことすら恥ずかしがっていたのに、同衾は平気らしいやはりどこかずれている。ミーシャのほづが、正常な反応だろう。

「ああ、おやすみ」

〜一時間後〜

リクトは、ベットを抜け出せないでいた。クーラに、腕を抱えられ、足を絡められている。ミーシャは、リクトに背を向けて寝ているが、尻尾をリクトの腕に絡めてきている。ふさふさしてやわらかい尻尾だった。

リクトは、二人に絡まれて抜け出せなくなっていた。それもクーラが頬擦りしてきたり、匂いを嗅いでくるので、くすぐりたいし、腕に当たっている胸が気なったりで、この日リクトはあまり眠ることができなかった。

4話 女騎士

次の日、三人と一頭は、ゲート転移門のある町を目指していた。

「そういえば、クーラとミーシャは、カネは持っているのか？」

ふと気になって二人に尋ねてみた。昨日の宿賃は、リクトが払った。

ちなみに、この世界の通貨は

金貨一枚＝10000コニ

半金貨一枚＝1000コニ

銀貨一枚＝100コニ

半銀貨一枚＝10コニ

銅貨一枚＝1コニ

1コニ＝10円くらいだ

二人は、持ち金を確認すると、

「銀貨3枚」

「銀貨2枚と半銀貨4枚」

二人合わせて5400円くらいだ。それでどうやって王都に行くつもりだったのだろうか？ 転移門を使わないと10日はかかる。どこかで依頼でも受けるつもりだったのだろうか、それにしただって無計画すぎる。

「お前達、本当に冒険者か？」

「あははははは」

「すみません。私達、駆け出しなもので」

駆け出しとか、そういう問題じゃあないんだが。気まずそうに笑うミーシャと、そっぽを向いて言い訳をするクーラを、呆れ顔で見るリクト。

「まあいい。王都までは俺が立て替えておくから。」

「そういうリクトは、いくら持つてるのよ」

ミーシャが興味本位で聞いてきたので、二人に硬貨を入れている袋を見せる。

「「わああ」」

「半金貨8枚と銀貨30枚くらいだな」

「11万円くらいだな。ログハウスには、まだまだある。」

「どうしてこんなにもってるの？」

「偶にギルドの依頼をやっていたのと、色々作った物を売っていたからな。それにあそこに住んでいると、ほとんど金を使わない。」

本当はそれだけじゃなくて、一度だけ大きな仕事をしたことがあるのだ、それも理由の一つだ。

「ああ、そつか。自給自足だもんね。いいなあ。依頼受けないとなあ。」

「その、なんだ、今度一緒に、依頼でも受けるか？」

「えっ、……うん、やる！。リクト、約束だよ。」

最初は驚いていたが、言葉の意味を理解したミーシャは、嬉しそうにして、約束を念押ししてくる。

「ああ約束だ。」

「私とも約束してくれますか？」

少し不安そうなクーラが聞いてくる。

「もちろん。」

「ありがとうございます。」

クーラが、嬉しそうに笑う。スレイもどこか満足気になっている。リクトの方から誘ったことが嬉しいのだろう。スレイは、お節介なところがあるから。

「そういえば王都には、何の用があるんだ？」

「いえ、用があるわけではなくて王都を拠点に、活動しようと思っ
まして。」

「地元でもう少しゆっくりしても、よかったんじゃないか？」

「その、地元には、居られなくて」

言葉を濁すクーラの様子からして、なにか訳アリなのだろう。

追求はしない方がいいよな。話したくなったら、向こうから話してくるだろうし。

「そうか」

「【主、町が見えてきたぞ。次の停泊は、あそこでいいのか】」

「ああ、あそこに停泊する。」

今度は、絶対二部屋とろう。

それから2日後、転移門のある町に到着した。早速転移門を使うために、転移門が設置されている場所に行ったのだが。ちなみに転移門は、同時に三人ぐらいが通れそうな大きさの白い扉に、複雑な魔方陣が掘り込まれた物だった。

「ダメだ、ダメだ、一般人に転移門は解放されていない。」

リクト達は、転移門を警備する騎士に、道を塞がれていた。リクトは通行証を見せるが

「通行証があるだろう。」

「そんなもの、偽物に決まっている。お前達のような、ただの冒険

者が、本物の通行証を持っているわけがないだろう。」

騎士は通行証の確認すらしない

「本物よ！ねえリクト？」

「たぶんな」

「リクト〜」

いい加減なリクトの返答に、困り果てるミーシャ。アメリカにもらった物だから、たぶん本物だ

「だいたい、本物ならその通行証、どうやって手に入れた。」

「人に貰った」

「も、貰える訳がないだろう！」

騎士が怒鳴るが、本当なのだから仕方がない。しかし、説明するのは面倒だし

「二人とも悪いけど、ちょっとどこかで時間を潰そう。その内、迎えが来るだろうから。」

「ええ、構いませんが、誰が来るんですか？」

「アメリカって騎士が来るはずだ。」

「ああ、スレイさんが言っていた。」

「暇つぶしに、どこかで食事でもしよう。」

「ちょっと待て。お前、今アメリカと言ったか」

その場を後にしようとしたリクトたちを、先程の騎士が呼び止めた。どこことなく怒っている気がする。

「ああ、そうだが。知っているのか？」

「最近復帰された、キュール王女様の近衛騎士だ。あの人と貴様のような者が知り合い？冗談も大概にしろ」

やはり怒っているようだ。もしかして、アメリカのことが好きなのだろうか？そうだとしても、そんなことで、俺に怒りをぶつけられても迷惑だ。思わず少し挑発気味に返事を返してしまう。

「あっそう。ご苦労様、そのアメリカに職務怠慢で怒られないといいな」

職務怠慢とはもちろんリクトの通行証を確認しなかったことだ。

「まだ言うか！」

突然騎士が、リクトに掴みかかってきた。思わずリクトは、その腕を掴んで後ろに投げてしまい、騎士を背中から地面に叩きつけてしまった。

元から美少女二人をつれているリクトに、あまりいい印象が無かった周りの騎士たちが、仲間を投げられたのを見て、騒ぎ出した。

「貴様何のつもりだ！」

「牢屋にぶち込んでやる」

「先に手を出したのは、その人です。言いがかりはやめてください。」

「な、なんだと！」

クーラが、それに反論して、騒ぎが大きくなりそうになった時

「お前達、持ち場を離れて何をしている？」

そこに、よく響く声の持ち主が現われた。茶髪をポニーテールにした、キリツとした印象の女騎士が転移門の前に立っていた。リクトが騎士を投げた原因になった、アメリカ本人だった。

「ア、アメリカ様、その、この者たちが、仲間を投げ飛ばしたので」

「投げ飛ばした？・・・うん？リクト殿ではないか！」

アメリカは、言い訳をする騎士たちの中からリクトを見つけると、顔を輝かせる。

「おう、早かったな」

片手を上げて返事をするリクトに、周りの騎士が驚く。

「お前達その人は、私の知り合いだ。解放しろ。」

「・・・も、申し訳ありませんでしたー」

騎士たちが謝罪しながら数歩下がり、アメリカに道を作った。

「リクト殿、久しぶりだな。」

アメリカが、リクトの傍まで走り寄って来て、両手でリクトの手を握って上下に振り回す。

「ア、アメリカ、ここだと何だから、まずは、転移門をくぐるぞ。」

リクトが、アメリカの肩を後ろから押して、転移門に向かう。騎士たちとクーラ、ミーシャの視線が痛いかったのだ。

「おお、そうだな。あつ、お前達、今後はこういうことはないようにな。」

騎士たちに釘をさしながら、アメリカとリクトは転移門に消えた。二人と一頭も、慌ててついていく。

「ところでな、リクト殿。こちらの、二人とはどういう関係なのだろうか？」

王都にある転移門の近くで、アメリカがクーラとミーシャを見ながら質問する。

「俺の山で拾った、迷子だ。」

「ちょっと他に言い方があるでしょ！・・・事実だけど」

ミーシャが、怒りながら恥ずかしそうに肯定する。

「リクト殿、そういうのではなくて、馴れ初めを頼む。」

「簡単に言うと、数日前、俺の山で迷子になっていたから、俺の家まで案内して、行き先が一緒だったから、一緒に行動している。こんな感じだな。」

「そうか、そうか、私とともに話してくれるようになるまで、3ヶ月もかかったというのに、私達の出会いが最悪だったのは確かだが、それにしたって……」

リクトのザックリな説明を聞いたアメリカが、何かに堪えているように身体をプルプル震わせながら、何かをブツブツ呟いている。

「どうしたんだ？アメリカ」

「別に、なんでもない。それより、馬車を待たせている。早く行く。」

「わかった」

リクトは、どことなく拗ねている様子のアメリカについて行く。

「ば、馬車ですか」

「リクトって何者？」

クーラとミーシャは、待遇に驚いているようだ。

四人は、近くに来ていた馬車に乗り込んだ。

馬車の中は、それなりに豪華なつくりだった。よく見る大人数が乗

るような作りではなく。ソファアが置かれており、精々六人ぐらいしか乗れない作りだ。

アメリカとリクト、ミーシャとクーラの組み合わせで座った。スレイは、外を併走している。

「アメリカさんは、どうやって、リクトさんと会ったんですか？」

「そうだよ。あんな山奥で暮らしているリクトと、どうやって会えたの？」

二人がリクトに出会ったのは、本当に偶然だった。アメリカまで、同じような出会いかただとは思えなかったのだ。

「それは今から姫様の所に行くのですし、主に聞いた方がいいですよ。嬉々として説明してくれますよ。」

「えっ、これから行く所って、もしかして」

「ええ、王宮のキュール姫様の所ですよ。」

「……………えー！ー！？」

5話 1年前のお話

リクト、クーラ、ミーシャはお城の応接室に通され、待つように言われた。スレイは、厩舎でお留守番だ。応接室には、大きめのテーブルと椅子が五脚用意されていた。

「どうしたんだ二人とも？少し落ち着いたらどうだ」

クーラとミーシャが、落ち着かない様子で部屋の中を、ぐるぐる歩き回っている。それに比べてリクトは、椅子に腰かけてのんびりくつろいでいる。

「リクトさん、お姫様なんですよ。王女様なんですよ。王族なんですよ。身分が違いすぎます。」

「気分、悪くなってきた。なんでリクトは平気なのよ？」

「姫さんは、あんまり身分を気にする人じゃないからな。それに、初対面があれだったからな」

「そうだな、私とそなたの出会い、かなり刺激的だったからな」

扉の外から声が聞こえ、声の主が扉をあける。扉を開けて入ってきたのは、赤いドレスに身を包んだ長い金髪に碧眼の小さな少女だった。この少女がキュール王女だ。

「久しぶり」

キュール王女は、リクトの言葉に返事をせず走り出した。そして、

リクトの近くでジャンプして、頭に飛び蹴りをかました。リクトが椅子から転げ落ち、キュール王女を抱き止める形になった。リクトの上で王女が起き上がり

「久しぶりっ、ではないわ！一年間も待たせおつて。」

「悪い悪い。そして、痛いぞ」

クーラとミーシャは呆然としながら、その流れを見ていた。キュール王女と一緒に来ていたアメリカも、オロオロして助け起こせばいいのか迷っている。

リクトがキュール王女を、持ち上げて立たせる。少しむくれているキュール王女が、腕を組んで。

「まあよい、今日は謝礼をするために呼んだんだからな。」

「飛び蹴りが謝礼かと思ったぞ。」

「そんなわけがなかつた！」

「それより周りを見てみる。皆、驚いているぞ。」

周りでは女達が、呆然とリクトとキュール王女を見ていた。

「むっすまぬ。醜態を見せたな。私は、ジルランド王国、第四王女のキュールだ。よろしくな」

「よ、よろしくお願ひします。クーラと申します。」

「お、お願いします。ミーシャと申します。」

恐縮しまくっている獣娘の二人。

「そう固くならずともよいぞ。それより、立ち話もなんだし椅子に座ろう。アメリカも座れ」

王女に進められて断るわけにもいかない。全員が椅子に座ると、キユール王女が楽しそうに

「お前達、リクトとの馴れ初めを聞きたくわなないか？リクトの奴が言いふらすのを嫌がるから、話す機会があまりないのだ。」

「是非、聞かせてください。どうやって出会ったんですか？。」

ミーシャがリクトの話題に食いついた。

「任せろ、この引きこもりとの出会いを、教えてやろう。」

「「「「「お願いします。」」」」」

クーラとミーシャはもちろん、アメリカも興味津々のようだ。ついさっきまで恐縮していたのに現金なものだ。

「あれは一年前のことだ。私が、何者かに誘拐されてな」

キユール王女が、語り始める。

一年前の王都

誘拐されたキュール王女は、南門の近くにある倉庫に縄で縛られて監禁されていた。王女のほかに、商人や冒険者の格好をした男達が6人いる。男達の様子から、外にも何人かいるようだ。

「もう少ししたら出発だぞ、王女様。」

小馬鹿にしたように、商人の格好をした男が王女に話しかける。

「直ぐに我が国の騎士達が、駆けつけるからな。覚悟しておけ」

「残念でした。あなたの国の騎士達は、偽情報に騙されて、北側を探しにいったよ」

「う、嘘だ。そんな簡単にいくか。全ての騎士が北側にいくなど、あり得ん。」

「それが可能なんだよ。なんせ偽情報を流しているのは、なんてったってあなたの婚約者だ。どいつもこいつも簡単に信じたらしいぞ。」

あの侯爵家のボンクラか

「そんなことを、私に話していいのか？」

「問題ねえよ。あなたはこの後で洗脳されるんだからな。」

「なっ何故そのような!？」

自分は、確かに王女だが、王族としての立ち位置は、それほど重要なものではない。その自分に、何故そんな面倒なことを

「あんだ、キリク坊っちゃんとの婚約に反対だったんだろ」

「当たり前だ！誰があのようなアホと」

侯爵家長男のキリクは、かなりの問題児だ。領地の娘を拐かしたり、気に入らない者を闇討ちしたり、という噂が絶えない。一度だけ顔を合わせたのが、取るに足らない男だったことだけは覚えている。

「王女様の方がそんなんだから、一芝居打つことになったんだよ。婚約者が拐われ、それをキリク坊っちゃんが助けてプロポーズする。洗脳された王女様は、それを受け入れるってシナリオだ。」

「……ッ」

「俺をにらまれてもねえ。悪いけど、そろそろ時間だ。眠って貰おうよ王女様」

男が、薬を染み込ませた布を持って近づいて来る。

「だ、誰か！」

「だから自慢の騎士様は、来ないって言ってんだろぅが。」

「ん〜」

キョールは、薬を嗅がされ意識を落とした。

次に目を覚ました時、何故か拘束されていなかった私は、外から入ってきた男を、思いつき殴った。

拳は当たりはしたが、その腕を掴まれてしまった。その時、男が意外なことを言ってきた。

「いつ痛、・・・ちょ、ちょっと待った。俺はあんたを助けに来たんだ。」

「・・・証拠は？」

「外を見てみる」

キョール王女は、男を警戒しながら馬車の外を見してみる。馬車の外には、見ただけで死んでいるほど酷い状態の死体が無数に転がっていた。

「うっ」

「すまん、見せるような物ではなかったな。」

思わず口に手を当てた王女を見て、男が視界を遮って外が見えないようにする。

「あれは全部、お前が殺ったのか？」

「・・・ああ」

「その、なんだ、さっきは悪かったな。」

「まあ、お姫様を、助けに来て殴られるとは思わなかったが」

「わ、忘れてくれ」

顔を真っ赤にするキュール王女。

「その、お前、名前は？」

「リクト・タキカゼだ。え〜と……」

「キュール王女だ。助けに来た王族の、名前くらい覚えておけ」

普通なら疑われるところだぞ、と内心呆れるキュール王女。

「すまん。口調はこのままでもいいか？」

「構わん」

「それじゃあ、早くこの場を離れよう。」

「何故だ？全部倒したのではないのか？」

「一人逃げられた。確認したいんだが、誘拐の犯人は、姫さんの婚約者の家で間違いないよな」

王女は、この時内心かなりの驚いていた。攫われた自分自身も、倉庫で聞かないとわからなかったのを目の前の男が知っていたのだ。

「そうだが、……何故わかった？いや待て、そもそも何故リクトはこちらに来たのだ？」

「北側にはかなりの数の騎士が派遣されていたから、行く必要がなかったのと、城から王女を攫えるような奴らが、北側に逃げたなんてわかりやすい痕跡を残すとは思えなかったんだ。だから俺は、あなたの婚約者が嘘を吐いていると考えたんだ。そして反対の方角の南に当たりを付けた、後は裏技を使ってこの馬車を見つけたんだ。」

「裏技？」

「それは、後で。まずは、この場を離れよう、侯爵なら、まだまだ私兵を持っているだろうから。街道は使えない。お姫様には悪いが一度森に隠れたいんだが、いいか？」

「構わないが、あれを私の婚約者などと二度と言わないでくれ。」

「わかった。行こう」

リクトとキュール王女が、森に近づいていくと

「いたぞ！、あの女を捕まえろ」

十数人の騎兵が、王都とは反対側から現われた。

「遅かったか、話し込みすぎたな。」

「すまん、わたしのせいで。」

「気にするな。走るぞ」

騎兵に近づかれる前に、二人は獣道に入る。奥に進むにつれ、獣道

は道の体をなさなくなり、ドレス姿のキュール王女は思ったように動けなくなり、移動速度が遅くなった。その変わりに話す余裕ができた。

「これから、どうするんだ？」

「仲間が、王都に援軍を呼びに行っている。援軍が到着するまでどこかに隠れる。」

「リクトは、あいつらを倒せないのか？」

「君を守りながらは無理だな。それに敵の数がわからない。」

「そうか」

「よしこの木に登ろう」

「は？」

リクトは、いつの間にか準備していた縄を使って木の上に登っていった。つてしまった。

その後で、驚いているキュール王女に、縄を絡めて木の上に引き上げる。

登った木は、かなりの大木で下からは、枝葉に隠れてリクト達の姿は殆ど見えない。これなら見つからないだろう。

問題は体勢だ。下から見えないようにするために、リクトの腕の中にキュール王女が座るような体勢になってしまっている。

「の、のう、リクト？」

「静かに」

「むっ・・・わかった。」

物心ついてから、異性と触れ合うことなどなかったキュールは、リクトとの密着に結構ドキドキしているのだが、リクトにその様子がないことに気付き、キュール王女は不満を覚える。しかし、今は非常時だから黙ることにした。

「なっなんだ？」

しばらく静かにしていると、リクトとキュール王女が登った木に小動物が集まってきた。その状況に驚き思わず声が出てしまった。しまったと王女が思っていると、リクトも話し出した。

「俺の友達だ。キュール王女を見つける手伝いをしてくれた。それから今は小さな声なら話していいぞ。」

「この子達が裏技か？」

「ああ、人間は、動物のことを警戒しないからな。簡単に見つかる」

「リクトは、動物と会話ができるのか？」

「まあな。」

どこまで不思議な男なのだろう。複数の敵に勝つ力を持ち、偽情報を看破する頭もある。おまけに動物とまで話せる。

キュール王女は、この不思議な男を心底気に入った。なので色々聞いてみることに

「何処に住んでるんだ？」

「なんでそんなことを聞く？」

「ダメか？」

「……山奥だ。」

それでは、何処かわからないし、会えない。

「王都に住まないか？」

「興味ないな」

「私は、お前に興味がある」

「動物と過ごしているから、無理だ。」

「むっ、何か望みはないのか？」

「のんびり静かに過ごしたい。」

「むっ、なら女に興味はないのか？」

リクトの物言いに、拉致があかないと思い、別の方向から攻めてみた。

「なっ何して」

リクトから驚いた声が出た。キュールが、小さいながらも確かな膨らみのある胸を、リクトの腕に押し付けたからだ。

リクトが、顔を逸らす。微かに顔が赤い。

「どうやら、興味が無いわけではないようだな。」

女をあてがうのが、可能性があるな。だが、それはなんか気に入らない。

「お姫様が、そういうことをするもんじゃない。・・・思いついた、キュール王女に頼みがある」

「なんだ、望みがあるのではないか。なんだ言ってみろ」

「俺のことは伏せてほしい。」

キュール王女がきょとんとして、質問する。

「・・・何故だ？」

「あまり表舞台に立ちたくない。」

「なら何故助けに来た？」

「俺しかいなかったからだ。」

「私は王女だ。助けられて、何もしないわけにはいかない」

「俺はキュールを助けに来ただけだ。王女だとかはどうでもいい。」
「なっ」

突然キュールが、顔を真っ赤にした。

「・・・そ、そうか、私を助けに来たのか、ならしかたないな。わかった。お前のことは伏せることにしよう。」

何故か、急にキュールが素直になった。

この頃のキュールの周りは、キュールを第四王女としてしか見ない者達がほとんどだった。しかしリクトはキュール個人を助けに来たと言つてのけたのだ。それが、キュールにはとても嬉しく心に響いたのだ。

「なら、私個人の謝礼なら受け取るのだな。」

「まあ、それくらいなら。」

「まずは、私をキュールと呼ぶことを許す。」

「それは、駄目だろう。王族を呼び捨てにするのは」

「身内だけの時なら問題あるまい。」

「まあ、そうだが」

「他の謝礼は、また今度だな。」

それからしばらくすると、一羽の小鳥がリクトのところに、飛んできた。小鳥が何かをさえずる

「援軍が来た。降りよう。」

「うむ。有意義な時間だったぞリクト」

この後、二人は援軍に合流した。

「とまあ、リクトとの出会いはこんな感じだな。」

キユール王女がそう締めくくった。

「リクトさん、やっぱり凄いです。」

「これで、終われば良かったのが、少し続きがある。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7694y/>

黒い刺青

2011年12月1日00時53分発行